

わたしの好きな本

「今月の一冊～わたしの好きな本～」（12月）

<ご紹介者>

矢祭町長 佐川 正一郎

矢祭町子ども読書の街づくり推進委員会委員長

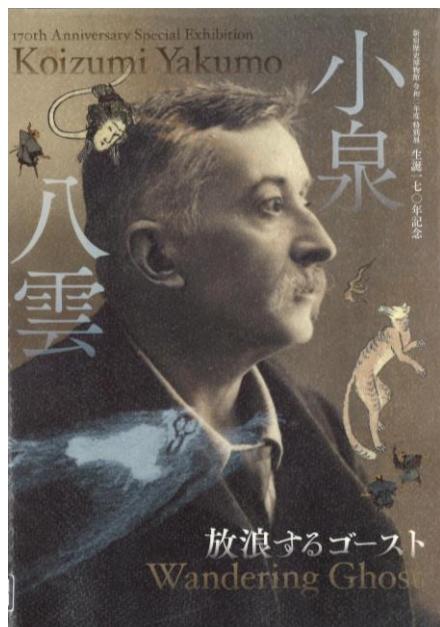


『小泉八雲

— 放浪するゴースト —』

池田雅之（監修）／新宿未来創造財団新宿区立新宿歴史博物館

対象：中学生から高齢者まで



内容のご紹介

12月に入り最も忙しく、また、寒さも厳しくなる季節です。お体を大切にしてください。小泉八雲の妻で小泉セツをモデルにした物語が今、朝のドラマで“ばけばけ”というタイトルで放映されています。異文化を超えた夫婦愛で夫を全て支えます。八雲は、紀行作家で多くの作品を残し、日本の文化を最も愛した人です。

私たちが子どもの頃、家族から八雲の作品の中で「耳なし芳一」や「雪女」、「ろくろ首」の話を聞かされた記憶があります。怖い思いをしながら興味津々でした。日本は文化の国です。八雲は私たちに民話を伝え、そして、世界へと日本文化の深さを伝えた人です。

この紹介する本の中で、八雲が描いた“蛙”的絵があります。八雲は、古今和歌集の中に「花に鳴くウグイス、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」に感銘し蛙の声に靈感を得る日本人の感性を愛したと言っています。

この機会に八雲文学に触れていただければ大変うれしいです。

八雲は、ギリシャのレフカダ島で生まれ、アイルランドで育ち、アメリカや西インド諸島で文筆家として活躍した後、明治23年（1890年）に来日しました。島根県松江市、熊本市、神戸市と移り住み、明治37年（1904年）、当時の大久保村西大久保（東京都新宿区大久保）の自宅で息を引き取ります。その生涯は、放浪の旅でした。幼くして母と離別し、若い日に視力を失った八雲。本展覧会では、生きづらさを抱えながら世界を放浪した八雲の旅路を小泉八雲の研究家：早稲田大学名誉教授池田雅之先生が紹介をしています。

（紹介文：新宿未来創造財団新宿区立新宿歴史博物館）

本作は小泉八雲の人生の終点の地である現在の東京都新宿区で、令和2年（2020年）に開催された小泉八雲生誕170年記念の展覧会の際に出版されました。※ ゴースト（幽霊、亡霊）（紹介文：矢祭もつたいない図書館）